

ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル
ムージルの初エッセイと二人の間の危機：
1910年-1911年の冬

長谷川 淳基

Robert Musil und Alfred Kerr
Musils Erstlingsessay und eine Krise zwischen den beiden: der Winter von
1910-1911

Junki HASEGAWA

現実感覚というものがあるなら、可能性感覚というものもあるに違いない（『特性のない男』第1部・4章）

I 始めに

時は1910年、ムージルはこの年の11月18日、午後の3時5分に小説『愛の完成』を書き上げた。平行して書き進めていたもう一つの小説『静かなヴェロニカの誘惑』は翌月、12月30日にほぼ出来上がり、年明け早々1911年1月11日に完全な形になった。「2年半ほとんど昼夜をおかず」これら二つの作品に没頭したムージルであったが、休む間もなく次の仕事に取り掛かった。エッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」の執筆である。エッセイは、この月末1月30日にはほぼ書き上がり、その後の推敲を経て、3月1日付の雑誌「パーン」第9号に掲載された。これ以前に、ムージルは工学関係の論文を雑誌に発表したことはあったが、この「芸術における猥褻性と病的なるもの」こそは、文学・芸術に関するムージルの第一作エッセイである。

ムージルの初めての小説『テルレス』に関しては、評論家アルフレート・ケルが決定的な貢献をした。彼の助力があって、この作品は世に出、ムージルは作家になった。そしてムージルの初めてのエッセイ、このエッセイが雑誌に掲載され、世間一般に知られることになったそのシーンにも、ムージルの傍らにはケルの姿があった。しかしながらこの度は、ケルがムージルの後押しをし、応援するという構図ではなかった。

エッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」は、他人の喧嘩の応援、助太刀のために書かれた。ここで言う他人とは、批評家アルフレート・ケルのことであり、喧嘩とはアルフレート・ケルとベルリン警察署長トラウゴット・フォン・ヤーゴとの間での、雑誌発売の差し止め措置を巡るいざこざのことである。

以下本論では、この事件にまつわるムージルとケルの関係、両者の文学観の特徴について考察する。

II 雑誌「パーン」発売禁止処分の発端 フロベールの日記

1911年1月16日付の「パーン」第6号に、「若きフロベールの日記」が翻訳紹介された。雑誌「パーン」はヴィルヘルム・ヘルツォークとパウル・カッシーラーが、前年1910年11月から隔週ごとに発行した文芸雑誌であり、編集並びに執筆陣の中心はアルフレート・ケルであった。「パーン」第6号に載ったギュスターヴ・フロベール（1821-1880）の日記であるが、これはフロベールが1845年と1849年から51年にかけて旅行先で書いた記録を、「パーン」がその一部分について紹介したものである。それまでにそのスキャンダル性も手伝ってフランスはもとよりドイツでも広く読まれていたフロベールであるが、1910年7月から12月にかけてフランスの雑誌「レ・マルジュ」がフロベールの未刊の日記としてこの旅行記を初めて印刷に付した。そして時をおかず、ベルリンの「パーン」はこのフロベールの日記に目を付け、早速に翻訳掲載したのであった。「パーン」第6号に載ったフロベールの日記は8ページである。その一部を読んでみよう。

若きフロベールの日記

以下、本誌において初めてドイツ語になった一法律上のトラブルを生じさせないようにとの当方の配慮により、外国語の表現を使用すべき必要はなかろうと判断した部分に限って一手記であり、ごく最近に人々の知るところとなったものである。20歳から30歳にかけてのこの手記を、彼は旅の途中にあつて、茶色の皮のノートに走り書きした。

ここに描かれているものは自然であり、この自然はものごとをあるがままに、気分を憧れと共に、これら二つを軽いタッチで捉えている。ここに描かれているものは、生の渴望に満ちた、てらいのない一人の人間である。ここに描かれているものは、偉大なる率直さを持った一やがて実存的な仕事を開始しようとしている一人間の刻々の時間である。

これらの日記を初めて世に出す勇氣と功績とを示した「レ・マルジュ」は、文芸愛好家にとって魅力に溢れる、優れた雑誌である。ドイツ語訳の掲載を許可していただいたことについて「パーン」は「レ・マルジュ」に心よりお礼を申し上げる

ミラノからコモへ

ミラノからコモにかけて、街道はゆっくりと登っていく。—コモの港、港とは言えないが—それゆえにすばらしい魅力がかもし出されている—、木製のアーチに幌をかけた小船は、銅版画に見るとおりのものである。この光景こそはイタリアであり、陽気で色彩感に富む。ヴェネチアのゴンドラが果たしてこれ以上に美しいかどうか、今の私には分からない。ただ私には世界中で最

も美しい定期船の光景よりも、これらの粗末な船の一つが作り出す光景の方が好ましい。海の風景は優美で、官能的、イタリア的であり、前景は険しく切れ落ち、家々は目を射るほど鮮やかな色調である。遠くには雪を戴いた山々、そしてえもいわれぬ程見事な家々。仕事をするための、愛のための家々。コモを出ると、左手岸沿いにタリョーニとパスタ。ソンマリーヴァの邸宅、ゴンドラに乗るために、石段が水際へ延びている。巨木の数々、噴水を覆い尽くすように茂っているバラ。カノーヴァのアモールとプシュケー。他の展示品は何も見なかった。その場所だけは、立ち去っては、また何度もすぐに引き返した。そうして、死の憔悴に襲われながらもアモールに自分の長い両の腕を伸ばしているこの女性のわきの下に、私はとうとう接吻してしまった。そして、彼女の足！彼女の頭部！彼女の横顔に！まことに申し訳ないことをしてしまった。でも随分長いこと、このような官能的な接吻に縁がなかったものだから。ここには、これ以上の何かがあった。私は美そのものを抱きしめたのだった。創造的精神—私の燃えるような欲望は、この創造的精神が欲しかったのだ。私はこのフォルムに襲いかかったのだった。[…]

幅の広い本当に勾配のきつい階段を、文字通りによじ登っていく。すると、湖の対岸に、黒と白の色調の屋敷—ゼルパロイン将軍の邸宅。三つの湖を望む景色……—ここでも生き、かつ死にたいものだ。

* * *

エジプト旅行（1849-1851）より

アレクサンドリア出航—ナイル川航行—ブーラック

日曜日早朝、小さな蒸気船に引かれたナイル船で出航。平坦で殺風景な岸辺を、何人かのアラビア人が裸のまま走っている。時折、馬に乗った男がやって来ては遠ざかって行く。トルコ風の鞍に、全身白づくめの衣装。乗船メンバー—背が高く、痩せて、上品そうな夫人、オーストリア公使の娘で、ギリシア風の服装、医者と結婚している。彼の方は枕を抱えて寝そべっている。[…]
ナイル川での初めての夜。誇らしさと崇高さが交じり合った感情。体を動かしてみる。ブイエの詩を誦んじてみる。ベッドに入ろうという気持ちになれない。クレオパトラ。川の水は黄色。静寂に包まれている。星が幾つか出ている。温かく着込み、簡易寝台で横になり、幸福な気持ちで眠る。[…]¹⁾

若きフロベールののどかで、幸せな旅の様子が偲ばれて、つい誘い込まれてしまう手記であるが、寄港先の町で見かけた道化芝居なども書き留められている。

お笑い芸。男が女に扮する。医者と患者たちのしもネタ芝居。「誰ですか？いいえ、ドアを開けるわけにはいきませんよ！誰ですか？」「…です」「誰ですか？」（繰り返しがあって）「娼婦です」「そうですか、お入りください」「先生は何をなさっていらっしゃいますの？」「先生はただいま、お庭です」「どなたと？」「ロバと、ですよ。それで、ロバとなにを…」

昨日、12月1日、城砦の入り口で道化師を見た。6、7才の男の子と二人の小さな女の子を連れていた。はだしのままで、先の角張ったウールの帽子をかぶっていた。二人の女の子が、手のひらでおならを真似てみせる。小僧の方は芸達者、小柄で、小憎らしく、遠慮がない—「お客さんが5パラ出してくれたら、母を連れてきてあげますよ、それからあとは—！あらゆるお楽しみが、ありますようお祈りいたします！特に、…が大きくなりますように！」。壺の中にお菓子があるのを見て、「アラー」と言うときの表情。アラビア語は本当にすばらしい。[…]²⁾

以上パーン6号に載ったフロベールの日記8ページのうち、出だしの2ページほどについて紹介した。この後に続く部分に、フロベールが娼家を訪れた折のメモもある。そこには「敷ものの上一固く締まった体一金髪の……剃ってあり、乾いていて、ぼったりしている」³⁾等の描写がある。

フロベールのオリジナルの手記には、もう少し具体的な描写がなされていたこと、「パーン」に載った翻訳は、オリジナルと比較すると文章のカットがあり、さらに特定の語彙を避ける配慮がなされていることから、少なくとも「パーン」6号がこの日記を理由に、当局から処分を受けたと考ええると、意外な気がしないでもない。

III ケルの抗議

1911年1月16日発行の雑誌「パーン」6号がベルリン警察によって差し押さえられたのは、1月21日のことであった。ケルは2月1日発行の「パーン」第7号に、ベルリン警察長官に宛てた形式のエッセイを発表し、この措置に真っ向から抗議する姿勢を示した。

ヤ ー ゴ , フ ロ ベ ー ル , パ ー ン
警 察 長 官 殿

拝啓

私はあなたに対して、特別の親愛の念を抱いています。理由は、あなたが私と同様に短い文を好む方だからです。あなたのことを、私の弟子とさせていただくという考えは、いかがでしょうか…? (考え方が相違しているという点について。) あなたは、好奇心を持っている者たちに、ごく短い警告を発します。一言でいうと、美文家です。このことを踏まえた上で、あることに言及しなければなりません。

生徒さん、あなたはこの前の「パーン」を禁止処分にしました。当初あなたは大変に不親切で、詳しい理由をおっしゃってくれませんでした。警察官一人が(一番お偉い警察官の方なのかもしれませんが)、意志の啓発に非常に価値のある(本当に! 本当に!)雑誌の自由な販売を抑圧する権限を持っているのでしょうか? そして損害を被る側の者は、理由の一つも尋ねることが許されないのでしょうか?

アポロの美しい兄弟よ、あなた自身お分かりのように、あなたは権力の誇示をおのれの目的としているわけではありません。あなたの職務に目的があるとすれば、それは教育上の影響ということでしょう。しかしながら、この先(と、考えるわけですが)どのようにして不快を回避することができるのでしょうか? すなわち、あなたの不興を買った事柄に関して、次の号の準備ができ上がる以前に何らの事情も知らされないままにいる場合のことです。どうです? 先の号には16本の文章が載りました。どれがあなたのお気に召さなかったのか、あなたはついぞ自白を拒んだというわけです。

[…]

II

「パーン」は書面をもって、禁止の理由をお尋ねしました。あなたはどうか答えくださったでしょう?

答えの代わりに次のような事態が生じたのです。あなた方のお一人が、平服で、バッジをつけた方が、出版社の部屋へやってきた、と、そう聞いております…そして街頭販売の禁止に加え、あらたな迫害措置として、雑誌の捕縛、連行を行ったわけです(それらは、わずか6部のみが、

この代理人の手にかかりました)。ご同輩、これが回答だったわけです。

そしてその後もなお、いずれの掲載記事がお気に召さなかったのか、あなたからお気持ちを伺うことはできませんでした。以下の複写、すなわちあなたの代理人が残して行かれたそっけない紙切れをご覧ください。一切を洗いざらい明らかにすることは、すばらしいことなのです。記念の品として。

III

友よ、美文好みのスタイリストよ、宗門兄弟よ。このくだりのところまで、私はこの文章を書き続けていました—そして、やっとあなたの文章がやって来たのです。情報がもたらされました。

このとき以前に、二つの世論、ベルリナー・ターゲブラット紙とナツィオナル・ツァイトゥング紙が、情報の不足について非難の声をあげていました。さて、明らかになった点ですが、文書室のミスがあった、ということ。ミスのために、通知文書の送付ができなかったこと…

(新しい号がほぼできあがっていました)

IV

いずれにせよはっきりしました。フロベールの日記がこの度の迫害に対する、当局側の根拠だったわけです。この先は、あなたを相手に(われわれ文士、仲良く二人だけということで)話を致しましょう—鍛え上げた言葉をもって世界を、寡黙をもって人生を創造する、この途方もない芸術家のこの書き下ろしが、どのような価値を持つのかという点について。[…]

創造者の脳髄の中を知ること。いまだなお謎の働き、通常はこそこそと隠し立てされて、嘘ではぐらかされているその働き。一世の中は、なんと多くの看視者の群れが彼らの周りに存在していることか、なんと多くのペテン師が、なんと多くの気取りやが、なんと多くの真実回避が、何というメルヘンの藪が彼らの周りに繁茂し、あいまいさの度を増し、支配し、脅かし…そして一切を押さえつける—こうしたことを、意識的に、しかしながら半ば無意識のうちに、忘れ去った若者たちの真実性。

動物のような自分の過去を思い出したくない、という気持ちは、なるほど理解できないものではありません—しかしながら、この稀なる男の、このフロベールの、この文筆の聖者の、世紀を代表するこの芸術家の忘れ去られていたノートの、その一頁ずつに日の光をあて、その一頁ずつを手でなぞり、そして呼吸し通したものは、はたして「動物のような」何かなのでしょうか？ 本当はその正反対のもの、つまり下腹部と頂きの世界との婚姻なのではないのでしょうか？ ヤーゴよ！—まさにこれこそは、ベニスの興奮、におい、不快感、好奇心、射精、恍惚…そして深い熟慮、静かなる草地、星座世界、運命の刻の間の飛翔なのではないのでしょうか？

V

作家よ、友人よ、美文好みのスタイリストよ、どういう男が問題になっているかは、もうお分かりであろう。ボヴァリー夫人を、カナリー諸島のどこかで、タコロンテで、山の中腹で、夜中に、10回読んでいただければ、…この本を10回お読みになれば、驚きの気持ちなどは二度と生じることはないでしょう。そしてそのときこそは、薄くあけ染める夜明け時、あなたの頬にいく筋か、涙の糸がつたうことでしょう—何か、おっしゃりたいことは？

それは感傷というものではないはずです！ 心が震撼させられたのです—一人の女性の破滅が描かれているからではなく、その破滅が永遠性と共に描かれているからです。同僚よ、そのヒロインに震撼させられるのではないのです、その人物を創造した男に心が揺すぶられるのです…さて。

VI

それからさらに、船の上で、ピレエフスからマルタ島へ向かう間に、あるいはアレクサンダー広場でも構わないのですが、感情教育をお読みになれば、そのとき、かのウィリアムが、天職に勤しんだエイヴォンの白鳥が、別の人物の姿で一より鮮明に、当世風に、より身近な姿で一突然、あなたの傍らに姿を現した、と感じるに違いありません。この本は、現世存在のあらゆる至高なるものに、あらゆる厳かな存在に、最も重要な存在の中に、最も熱いものの中に、まやかしの存在を見えています。覚醒を、不十分なる世界を、希望と所有の間の永遠なる深淵を、期待と実現との間の、中空での漂いと地上での這いつくばりとの間の、夢と行為の間の深淵を、形而上学を排した一切を（この文には終わりが無い）…凝視しているのです。要するに、ヤーゴよ、執務を離れたときは寸暇を惜しんで、アレクサンダー広場で、感情教育をお読みなさい。

そうすればこのノートの一頁一頁について禁止しようなどとは考えなくなるでしょう。

VII

さてこのノートに言及しなければなりません。サランボーはアフリカで起きた物語です。彼はこれを書く以前に、その地に滞在しました。その地に滞在したとき、彼はスケッチを書き記しました。あなたが禁止したメモです。

あなたは、現世の芸術家に絶賛されている作品、真の彫琢が施されている作品の習作に当たるものを、苦いものに変えてしまおうというおつもりでしょうか？ カルタゴの作品と誘惑された聖アントニウスだけが、この日記によって光を当てられるわけではありません。[…] ヤーゴよ、美文家よ（あなたこそは美文家フロベールと親しい関係を結ぶべきでしょう！）—もしも彼が常に、その寡黙で、率直な（それゆえに淫らな）ノートのことを念頭に置いていなかったというならば、私は、下品な人物というそしりに甘んずるつもりです—このノートは、その偉大な人生の偉業が開始されるにあたり、その澁刺たる手が思う存分になぐり書きたものなのです。

…そして、あなたはこれを禁止しようと思ったのでしょうか？

VIII

私には分かっています、今やあなたは新たな目でこの人物を見えています。

最も人間的な問題、刺激的なことがらが表現されるときに、あなた自身、肝をつぶすなどということはないでしょうし、私にしても同じです。それならばなぜ、そうしたものが教養ある読者に与えられていけないのでしょうか？

情欲がもたらされるのではないのです。知識が拡大されるのです！ ポルノまがいの読み物はいくらかでも取り締まってください。しかしながら、歴史的価値を有するものを禁じてはいけません！

ドイツの法律は、性的刺激がもっぱら芸術上の目的のための手段として役立つとき、何ら動揺するものではありません。今、ここに芸術的目的が存在していることを、まだお疑いになっておられるのでしょうか？

IX

…最良の人々を侮辱することは、決して誉められることではありません。時々思うのですが、殺人犯何某はまだ捕まっていない、との非難は不当なものです。いやはや、何百万の住人がいる中でこれは大変に困難なことです。しかしながら、長官、よろしいですか、本当に由々しき事柄について申し上げます—何の罪もない—市民、年寄りのヘルマンさんをこの世からあの世に追いやった犯人を、あなたの部下が、自分たちの身内の中で起きたにもかかわらず、今日に至るまで発見していないということ、このことです。世間一般の人々が、重要な人物、衣服を脱いだ

一人の非凡な人間と、率直に知り合いになること、このことは先のことと比べて、より大きな騒ぎ、より大きな問題をこの国にもたらすでしょうか？ あなたのお膝元にいる殺人犯を、部下が発見できずにいるときに、一本当にこんなことをしている余裕がおりないのでしょうか？ こうした状況で、あなたは「パーン」のことを、本当に大問題だとお考えになるのでしょうか？

あなたは過ちを犯しました。検事も同様です。あなた方は（まじめに申し上げますが）心の谷に下りていくべきです。そして、お考えなさい（第一日目のように）—あなた方は何のためにその職に就いているのか、と。

罪のない魂を、毒から守るため？ おそらく、そうでしょう。しかしながら、遠く遥かな山峡へと続く小道を、成人たちに閉ざすためではないでしょう。そしてまた、よろしいかな優等生さん、この街道は現に人が行き交い、なくてはならないものなのです。—

さらに言うと、過ちを認めること、これは恥にはあらず。—

敬具

同僚への思いを込めて アルフレート・ケル

グルーネヴァルト、1月30日⁴⁾

第6号が差し押さえ処分を食ったことに対し、ケルは真っ向から抵抗する態度に出た。差し押さえ処置を確認する文書の実物コピーを載せ、警察権力の横暴ぶりを、身内の不祥事への追及の甘さを暴露しつつ、フロベールの日記の文学的な価値を説くこの書簡体の文章には、ケルの決意のようなものがみなぎっている。しかしそうした姿勢を示す一方で、ヤーゴに宛てた手紙形式のこのエッセイには、ケル一流のユーモアとレトリックが盛り込まれており、その限りでは、この時以降に両者が何がしかの歩み寄りをするなどとも想像できないものではない。

ケルのこの記事の日付は1月30日付になっている。

ムージルもこの日、1月30日、自身の日記にこの件に関連した事柄を書いている—雑誌「パーン」に載せるためのエッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」をほぼ書き終えたこと、プライの主宰する雑誌「デア・ローゼ・フォーゲル」に載せるためのエッセイ「親愛なるパーン！」を書き始めたこと、ケルに手紙を書こうと考えていること、ケルは自分にとって運命的な人物であり、自分の対蹠者であること、そして今回の事件については、ケルを応援したいと考えていること、等についてムージルは書いている⁵⁾。「パーン」6号の差し押さえは1月21日に執行された。事件を耳にしたムージルは10日間足らずで、「パーン」すなわちケルを援護するためのエッセイを書いたのである。

2日後、2月1日付で「パーン」7号が出た。ベルリン、そしてドイツ中の読者に、「パーン」差し押さえ事件の詳細とケルの対決姿勢が、センセーショナルな形で知れ渡ることとなった。上に引用したヤーゴ宛のケルのエッセイを通して、である。

ムージルも当然のことながら、この7号に熱心に目を通した。2月11日の彼の日記—

2月11日 先日、ケルから葉書が来た。彼が編集に加わっている「パーン」に書くようにとの依頼。ヘルツォークからも同じ趣旨の返事。しかし原稿ができていない。1月30日に、ほぼできていたとの書き込みを、信じられない気持ちで読んだ。僕は急に吐き気がして、先を続けられなくなったのだ。そのあとケルのヤーゴ宛の書簡体記事を読んだ—とてつもなく的確だ—ばくの原稿は文体上の姿勢に反して、見事に科学的で、幾何学的だった。1, 2, 3, a, b, c, …という具合に。しかしそんなことが許されるのは、本当に城を築くような場合だけで、そうでなければ、

科学的良心というものにあくびをしながら、自明なことがらを一つ一つ数え上げて、結局は上の階を建設することに失敗するだけのことだ。今は、もう少し色彩豊かなものを書き出した。(TI, 235 f.)

この時期のムージルは、ケルに対して大変に気持ちが揺れている。というよりも、愛憎の感情はひとつである、ということかもしれない。この日記の中の、「急に吐き気がして…」のくだりは、ここの文だけを素直に読むならば、ケルのヤーゴ宛の記事とは何ら関係がなく、自身の文章に、当のムージルが強い不満を感じただけのように読むことができる。しかしこの書き込みの2ヶ月ほど前の同じ日記の一節を重ね合わせて考えてみると、この「吐き気…」には、微妙にケルへの反発があるように思われる。すなわち、

(1910年)12月初め 収入を得るために、新聞や雑誌に書く可能性を探してみた。文芸欄を仕事の中心に置くという考えは、「ノイエ・ルントschau」や「パーン」であっても、ぼくはこみ上げる吐き気を抑えることができない。誰かぼくと似ている男が、あってもなくてもどうでもいいような、こうした文章の下にぼくの名前を見つけることになると思うだけでも、恥ずかしい。[…](TI, 230f.)

「パーン」の主筆はケルである。「パーン」などに書かれているものは、「あってもなくてもよいような」文章であり、こうしたものを書く行為に「吐き気を抑えることができない」とムージルは言っている。しかしこのように書くそのすぐ次の日記の一節では、この気持ちと矛盾するような書き込みがある。

ウィーン 12月末 「ノイエ・ルントschau」のケルの文章にまたも強い衝撃を受けた。ここでは統一性は、個人の堅固さの中に存する。因みにぼくの理解に間違いがなければ、彼は今度もやはりこう言っている―「出来事、事物等々を提示しなければならない、雰囲気ではなく。叙情がことさらに付け加えられるべきではない」。(TI, 231)

ケルの格別に優れた能力について、ムージルは疑いを抱いてはいない。ただし、自分はケルとは違う人間であらねばならない、との意識がムージルの中に形成されつつあった。1910年11月の「パーン」創刊から翌年の2月にかけて、「パーン」あるいはケルについて、ムージルはその時々、異なる感情を抱いている。ケルへの気持ちの揺れである。『テルレス』出版以後、ケルに抱いてきた無条件の信頼に隙間ができるようになった。ケルは雑誌「パーン」の創刊を祝って、「パーン」宛てに「編集者への手紙」を書き送った。この「手紙」は「パーン」1号に載った。ムージルはこの手紙の中の、ケルの言葉尻―「私という存在にとって、文学は単に片隅の一つを埋めるものに過ぎないのであり」⁶⁾―を捕らえて、こうしたケルの文学観に非常な不満を感じ、「自分たちの精神の産物について軽蔑するように話す文士たち。ケル […]」(TI, 230)と、日記に書いている。「深く掘り下げられた人間芸術とおやつのレシピとの違いをもう一度はっきりと際立たせること […]」を訴え、芸術に潜在する大きな力を強調するための、言葉のあやとも考えうるケルの言葉を、ムージルは自己流に解釈している。ケルは文学を「軽蔑するように」は書いていないし、そう考えてはいない。しかし、ムージルのケルに対するこのときの判断には、ムージルの生涯を貫く文学観が反映されてもいた。ムージルは、ケル

の存在を利用して、とは、自分流の決め付けをして、自己の文学の立場をいよいよはっきりとさせた。

1月末にはぼ書きあがっていたエッセイであったが、ムージルは、2月11日の日記にあるようにすぐに自身のエッセイに不満を覚えた。そうしたムージルの気持ちの揺れは、日頃は反発を自覚することもあるケルへの気持ちと、いざケルのきらきらと輝くような、颯爽としたエッセイを目の当たりすると、その文章に無条件に圧倒されてしまう事実の間でのムージルの戸惑いの現れであったかもしれない。

ケルへのそうした気持ちをムージルは別のエッセイで形にした。エッセイ「親愛なる『パーン』へ！」⁷⁾で、ムージルは、マッターホルンに挑む情熱こそを、真の「情熱」と了解して喜ぶツェルマットの観光客ならびに「パーン」、そしてケルに対して、無名の作家が「熟慮を重ねて紙」に向かう情熱こそ、真に偉大な情熱であると語りかけている。

さてケルであるが、ケルはこの雑誌差し押さえ事件については、当初から何か全面対決といった気持ちでいたようだ。ヤーゴ宛てエッセイのどこか軽い調子とは裏腹に、ケルの念頭には、「歩みより」などの考えは金輪際なかった。すなわち、この7号には、6号で予告されていたおりに、フロベールの日記続編の掲載が強行されたのであった。ケルないし「パーン」の言うように、質問状に対し警察側から迅速な回答を得られなかったことにより、その結果として7号の内容が図らずもこうした結果に、すなわちフロベールの日記の続きを載せることになってしまった、というこの弁明、釈明の言葉と、この7号の表紙にある内容一覧のレイアウトとを見比べるならば、ケルがいかに強い決意をもって、警察権力に抵抗しようとしていたかが一目で分かる。7号表紙には、ことさら当局への挑発的意志を誇示するように、「若きフロベールの日記」だけが全文字を大文字表記にした強調書体で印刷されている。「フロベールの日記が原因で差し押さえ処分になったとの事実が判明したときには、時すでに遅し、7号はすでにでき上がってしまっていた」との弁明が、単に当局への通り一遍の説明でしかないこと、このことを誰にも分からせるという方法で、ケルは警察側への反対姿勢を、読者に、社会に効果的に印象付けた。この7号に載ったフロベールの日記は9ページ、先の「パーン」6号に載った日記の続きにあたる。6号掲載分と同じく、フロベールのオリジナルからの抜粋である。掲載された内容のうち、目立つ箇所は、「かの評判のソフィア・ルシュク・ハーネム」との一夜の交際の描写である。夜中ルシュクのベッドでまどろみながら、フロベールは、寄り添って眠るユーディットとホロフェルネスに思いを馳せたりする。「2時45分に目覚める。一…優しい気持で…。言葉は要らなかった、ぼくたちの身体のすべてが、饒舌に会話を交わした。」⁸⁾

「パーン」7号は、6号に続き差し押さえ処分にあった。2週間後の第8号でその事実を読者に向け韻文で報告したケルは、続いて3月1日付「パーン」9号に、再度ヤーゴ宛ての手紙を掲載した。そして同じくこの9号に、ケルを応援するムージルのエッセイが載った。文芸に関するムージル初のエッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」がそれである。まずはムージルのエッセイの方を、ただし半分程度は省くことにして、読むことにしよう。

IV ムージルの処女エッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」

芸術における猥褻性と病的なるもの

この論文の筆者は、心理学的な魅力に富む著名な書を著した詩人である。その書は数年前に著者の処女作として

世に出、真剣この上ない批評により最高の賞賛を受けた。
その書とは『生徒テルレスの惑乱』であり、今日に至る
もなお『危険な年齢』の発行部数に届いていない。

賢明な方々にはとうに知れ渡っている意見を、ある外的な目的のために検討し直すことは議論の余地なく退屈なことである。が、場合にもよることだが、これ以上は更に繰り返しおおよけに議論される必要などはないと判断されるほど完璧に、その内情が理解されている事態などは、存在しないのである。ベルリンでフロベールが禁止された。この禁止措置が法律を無視して行われたという事実—というのも、「刺激的な性描写は、芸術上の目的がこれに結ばれているときには許容される」と定められているのである—、この事実については、アルフレート・ケルが先の号の中で、簡潔な言葉により証明をしてみせた。しかしながらフランクフルトでは、婦人の危険な年齢をテーマにしたカリン・ミカエリスの講演についても禁止の措置がとられ、ミュンヘンでは、聴衆はそのつど男女いずれか一方に限ると言う条件で、この講演が許可された。読者諸賢には以下の各ケースについて、当局と世論の一致についてお考え頂きたい。

商人でもあり芸術の保護者でもある男が、日本の版画作品を展示するとしよう。それら作品の中では、もつれ合い絡み合う何組かの男女が、ブドウの房を想わせる集団を形成し、彼らの四肢は、ブドウの蔓のように床の上をくねくねと這いまわり、そうかと思うと、ことの後に襲ってくる虚脱の、えもいわれぬ虚無の中を、コルク抜きさながらに、自らのうちに戻って行き、攪拌のときにできる泡を思わせる目が、表情を失った乳房の上方に、ぶらさがるように張り付いている。あるいは、一人の芸術家がこの一煎じ詰めればまさに市民的平俗と言う他はない一営み、すなわちフランス人が恍惚感から、例えばフェリシアン・ロップスの手紙に書かれているように、聖なる丘への接吻と名付けている営みを、描くとして一聖なる丘への接吻とは、おそらくは、男の背中の湾曲が犬の欲望を想わせ、女の無関心がぼんやりとあらぬ方を窺っていることを踏まえての表現だと考えられる。あるいは誰かある作家が書くことを想定してみよう—ここにある男がいて、彼は母の震える手を見、そしてその手をもっとぐったりするように、もっと震えるようにと、何か全く事実とはかけ離れたこと、作り話、単に苦痛をもたらすだけのことについて、嘘をつき、嘘をつき、そしてまた嘘をつく。あるいはこうも書くかもしれない—血縁の近い一人の女性が裸で手術台上に上っており、すでにメスでえぐられている。不幸に見舞われた女性を、物に対するようにして扱い、そして彼女を丸裸にしている、との思い。とっさの決断を下さねばならない時の、狭い意識の地平。足を踏み入れたことのない領域について思考が働かない、との思いがよぎる。しかし誰かが話している—即物的に、短い言葉で、医学的に一指揮をとっている男が、紳士が。そして今ここにビクリとも動かずに存在するもの、傷、半ばここには不似合いなもの、花びらのよう、半ば血でねっとりとしたもの、ぴんと張った脇腹の白い皮膚の真ん中が開いている、口のように…。機械的な連想…接吻、唇の無防備な皮膚をそこに押し当てる…。なぜこんな連想が？誰に分かるはずがあらうか。外見上の類似、憂愁？…それについて一瞬の戦慄、それから再び命令の言葉、そして素早い処置。そして自己の人生との突然の思いもかけなかった決着、あつと言う間もなく。そして、この偶然の衰弱の瞬間をこんなにも長い時間漠然と待っていたということ—命令、内部に及ぶ処置、ただ自分自身とのみ共に存在している間に、この線の、この軌道の白痴化。最も確実と思われるもの、最も存在感のあるものをめぐる、魂を、空虚な轟音が響く中で紙くずのように丸める。—これは心理的抑圧である（あるいは教授への、同僚たちの張り詰めた緊張への反抗との思いがよぎる、あるいは深い闇の真っ只中で、自己への柔らかな衝突）、

飛散、ひとかたまりの葉、すなわち自我が一枚また一枚と風に揺れ、舞い散る。遠く離れ色褪せた自我の並行存在、抑圧され、時間と共に追いついては追いつけぬ経過途中のあれこれ、興奮の一こま一こま、これらは決して完成を見ることはなく、しかしながらやはり性的な関心であり、しかしながらここでは許されるものではなく、しかしながら人に利益をもたらすプロメテウスの孤独な英雄ぶりを偲ばせるもの—こうしたことが初めて実感される。続いて一時々に、タイミングよく科学用語の鋭く落ち着いた同歩調があって、つかの間、気分が高揚し一昼の明るさ、残忍性、彼女の生命を戦い取ることへの意欲、敵意、そして邪気のない親しい同居生活の中で彼女を徐々に窒息死させるであろうという苦悩が生まれる。さて作家であるが、作家はあくまでもこだわるのかもしれない—母、妹もまた、一条まとわぬ裸の女性のままであるという点について、そして、最も非難を浴びると思われる状況があってこそ、言うなれば、りっぱに成し遂げられた虚構があってこそ、この事実が意識に上るという点に。

フォン・ヤーゴ氏は非常に分かりやすい件に関して—それを、誰かが実行に移したからといって、それによって深刻な非難など招くことのない行為を巡って起きた事なのであるが—、表現に結びついていく芸術的な目的をうっかり見過ごしてしまった。この目的は、教訓めいたものとしてくっ付いていたというものではなく、人に対して何らかの価値を与える人間存在の中に込められていたものなのであり、そうした人間存在が話し方の点で、輝き震えながら発話の方法を求めて共鳴していた、というものである。しかしながら、表現のすべての人間的価値について考えるとき、あらゆる表現芸術について考えるとき、それらの意義が十全に認識され、従って否定される必要などは全くないような場合について、正当性を証明する十分な根拠を有する芸術的な目的が、それにもかかわらず否定されたり、あるいは完全に否定されないまでも別の目的が優先されたりするケースが存在するのである。つまり、芸術的な表現を付与することを認められないケースが存在すること、これについては、警察長官や検事によるプログラムだけではなく、今日では芸術を扱った雑誌のプログラムもこうした事態を作り出しているのである。ここまで私はこうしたことを遠回しに語ってきた。そして以下はこれをテーマとしたい。すなわち、ドイツという文化社会において、人々が話題にしない事柄がある。この事実を、私は恥ずかしいと思うだけではなく、大変に腹立たしく感じる。私はこの事実に対抗して、芸術は非道徳なものや最も非難すべきものを、描写してもよいというに留まらず、これを受することも許されるという立場を代表しようと思う。

[…]

問題は科学における場合と異なるものではない。学術的な書物には、解剖学的な、従って害をもたらすことのない猥褻と倒錯のすべてが見出されるが、それらの内部の像は健康な魂の要素をもってしては、決して再構成しえないものである。我々は、建前としての仮の立場、すなわち同情、社会的な義務、あるいは医者（独特のまばたきをしながらの）救済者の表情で、自らを偽ってはならない。問題の出来事への関心は直接的なものであり、それは知ることを欲する。そしてまた芸術も知ることを欲する。芸術は猥褻なものと病的なものを、これらと正しいものや健康なものとの関係を通して、表現する。つまりは、芸術は正しいものと健康なものについての知識を拡大する、ということである。

芸術家が受ける印象、つまり、何か回避されたもの、はっきりとしない感覚、感情、そして意志の運動は、芸術家の内部でばらばらに分解され、それらを構成していた要素は、硬直した日常の関係から解き放たれて、突然に全く別の諸々の対象と、それまでは思いもかけなかった関係を持つに至ることもしばしばであり、一方ではその際に、それら対象の分解する音が一種自動的に

共鳴し始めもするのである。道を開くことはこのようにして成就され、様々な関係が破砕され、意識は自らが歩く道を穿つ。その結果は、描かれるべき出来事の、たいていはただ不正確なだけのイメージ、しかしながらその周囲には魂の親縁が発するほの暗い音色、大きな感情の、意志の、思考のつながりのゆっくりとした動き。これが現実には起きていることの内容であり、そしてこうしたふうに、病的で醜く理解不能の、またはただ慣習に従って軽蔑されてきた事象が、芸術家の脳髄には映るのである。しかしながらまた、このことは一関係の鎖に繋がれることによって、そして、その事象を持ち上げ、自らに引き寄せ、そのものの自重による圧迫を押し上げる運動に捉えられることによって一、そうした表現を理解する者の脳髄の中においても、同じように映ることになる。こうした全体が、表現される対象であり、これを礎にして一そしてこれ以外の何ものにも基づくものではなく、つまり宮廷俳優の上品さで堅琴を爪弾くような道徳心に依拠などはせずに一純化し、自動的に抽象化を行う芸術作用が働くのである。現実の中で、熱いしづくのように丸く固まっていたものが、今この時、解き放たれ、解体し、そしてつれ合う一浄福と人間性の獲得。こうして生み出されたものの違いを理解するには、病人が描いた作品を手にとってみれば、それで足りる。

[…]

本当のところ、倒錯や非道徳は必ず、いわば対応関係にある健康や道徳を併せ持っている。これについては、倒錯や非道徳を構成しているあらゆる要素は、共同生活を営むにふさわしいような健康な魂の中にも、必ずその相似の要素を有するものである、ということを前提にしている。そして、この前提は正しいものであり、詩人にとっては、例えどのような例が眼前に持ち出されようとも、これを証明することに何らの困難も感じることはない。すべての倒錯は表現され得る。それは、正常なものを素材として、倒錯を化学合成するという方法で表現される。さもなければ、何ゆえこうした表現が人々に理解されえようか。こうした化学合成の行為を基礎に、表現は個別事実から離れ出るのであり、そうした行為が可能性であればこそ、雛型を人間的なものとして獲得できるのである。さらには、この行為が決定的な地点で、価値ある要素を獲得できたときこそは、まさにそれが価値創造に他ならない。これぞ、非道徳と倒錯への理解と、詩人のこうしたものへの愛を可能にする組み合わせ法への鍵なのである。

[…]

こうしたことを避けようとしめない芸術により、価値あるものが眼前に提示されるや否や、これに猛反対を加えるなどは、恥ずべきことでもあり臆病な態度と言わざるを得ない。何かある特定の価値に誘われるのでなければ、人はこうした領域に足を踏み入れたりしないものである。健康一辺倒のドイツ芸術、赤い頬の子供が立っているこの場所は大変に窮屈である。諸々の危険は否定されるべきではない。半ばの欲望というものがあり、それは人生の中で実現を試みるものとしては不十分ながら、芸術の中で試すものとしては、こと足りるものである。そして世の中には後者を目的に、人生を芸術として利用しようとする人間も存在するのかもしれない。そしてその場合、彼らは先に述べた例のエネルギー転換の影響を被ることになるであろうし（因みにこの場合は、そうした人たちが病んでいるかどうかは、どうでもよいことになる）、そうでない場合は、そもそも芸術が話題にもなりえないということである。それにもかかわらず、すべての副次的作用を排除するためには、こうしたことすべてをもってしても不十分であろう。なるほど、読者の中には原材料の部分だけを好んで受け入れるという方もおいでになろうし、芸術は科学に比べ、活発かつ規律に縛られることのない内面に、より大きな影響を及ぼし、それゆえにより危険であるということもその通りかもしれない。しかしこれらは問題点であるとはいえ、決して否定の

ための根拠とはならない。科学に付き従う者の中にも、魂を略奪する兵士が存在している。そしてそれにもかかわらず、この先の将来一開かれた道を通して一科学が今よりもずっと民衆の中へ侵入して行ったときに、人は科学を禁止しないであろう。科学に対して行うことは、芸術にも行うべきである—不快に映る副作用については、その主要目的に照らして目をつぶること、さらにはこの主要目的が獲得したすばらしさをもって、副作用の方は相殺すること。というのも、人は前に向かって改革を行うべきで、後ろ向きの改革をするべきではないからである。社会の病氣、革命は、蓄積され続けている愚かさによって抑圧されている進化である。

人は、芸術を理解するためには、実生活においても別の考え方というものを学ばなければならない。人は、道徳として何か共通の目標を取り決めてもよいが、しかしその際には、非常に大きな規模で協道というものが付随して、存在するべきである。そして、こうしたものを目指す運動に、強い前進意志をもって賛成の意思を持つべきである、考え事をしながら道を歩いているときに、危険に出くわし、つまづいて転んでしまうことのないように⁹⁾。

このエッセイをムージルは、ケルの応援のために書いた。問題はそれがムージルの本心であったのかどうか、である。本心でもあり、別の意図もあった、というところがこの問いの答えであろう。

「応援」がムージルの本心であったことの理由は、何よりも先に引用したムージルの日記の書き込みである。ムージルは全く別のテーマについて、エッセイを書いてもよかった。ムージルはこのテーマをみずから選んだ。そして、エッセイ全体でも、フロベールの日記が理由で、「パーン」が摘発されたことに、はっきりと異を唱えている。しかし、応援の効果ということを考えあわせてみると、ムージルは、ケルないし「パーン」を援護することを第一の目的に、最重要な点と考えてこのエッセイを書いたのかどうか、にわかに分からなくなってしまう。ムージルのこのエッセイは、ケルないし「パーン」の応援にかこつけて、自らの文学論を縦横に展開したもの、と考えるべきものである。

「フォン・ヤーゴ氏は非常に分かりやすい件に関して…」、ムージルはエッセイの第三段落をこう始めている。このエッセイを読む読者は、このくだりで、何か不思議な迷路、極彩色で、あるいはそれとも逆に白黒二色の淡彩で描写されているようにも感じられる迷宮から外の世界にでも出てきたかのような、なにか呆気ないような、しかし間違いなく、それと共に幾分かの安堵の気持ちを覚えるに違いない。第二段落の文章が分かりにくいのである。連想が連想へ繋がり、そこにあるものは浮世絵版画か、手術台の人間であろうとは思ふものの、観察する者の脳髄、その意識、これを書き留める手の厳密さと、厳密さに反するような想念、その飛躍…。

ムージルのこのエッセイは作家ムージルの自己主張であり、内なる文学の告知である。フロベールの日記は素材である。素朴で、飾り気がない。もちろん、「単なる旅行記にとどまらず、記録から迷いだし溶けだした表現や記述が読者自身の幻想や記憶の奥底に忍び込む」¹⁰⁾ということが、フロベールのこの日記の描写にはある。しかしそれはやはり、優れた紀行文とはこのようなものである、ということであろう—旅行記作家としてのケルにとっても、その意味でこの「日記」は特別に魅力のあるものであった。しかし、ムージルが弁護しようとする世界は、エッセイ第二段落の「作品」世界であり、ムージルはここで自らの「組み合わせ法」を披露している。ムージルの理屈からすると、フロベールの日記はそうした組み合わせ法がなされる以前のものであり、これはやはり猥褻文書と断定されても、仕方がないということにもなりそうである。フロベールの日記擁護論の論理だけに限って言うならば、先に引用したヤーゴ宛エッ

セイの第V章で、ケルはフロベールの小説を「覚醒を、[...] 夢と行為の間の深淵を、形而上学を排した一切を [...] 凝視している」ものと特徴付けており、この点ではムージルのエッセイはケルの主張の繰り返しにすぎない。ただし、事実を小説に仕立てる場合の、作家の脳髓の仕組みを、「はい、このとおり」と極端な例でみせるその技量は、ただもうムージルだけの世界である。このエッセイは、その意味ではムージルの渾身のエッセイということができる。

V ムージルとケル 「読者」についてのそれぞれの思惑

「パーン」6号に続いて7号が警察の処分を受けたことについて、ケルと、そしてムージルはそれぞれにペンを取った。ケルは、「今」の闘いに勝ちを収めることが目的であった。警察権力への真っ向からの戦いぶりは、捨て身とも言えるほど激しいものであるが、彼には勝利を収める自信があった。その拠り所は、読者であり、世論であった。

ムージルは、「何か」を勝ち取ることを目指しているが、「今」には何らこだわるところがなかった。そして、ムージルが目指す目的、世界との関連で言うならば、警察はもとより、ケルが頼みとする「読者」も「世論」も疑わしい存在であり、場合によっては、それらは彼と相容れない一つの敵対グループであった。ムージルは、彼のエッセイの第一段落で「読者諸賢には以下の各ケースについて、当局と世論の一致についてお考え頂きたい」と始めている。世の中には一般道徳がある。警察のとった措置は、そうした一般道徳へのパフォーマンス、デモンストレーションでもあったろう。ムージルは、自分のエッセイの読み手をどのようにイメージしていたらうか。そもそも、そうしたことを具体的に考えていたかどうかとも怪しい。彼は、ケルを読み手にしていたのかもしれない。そう考える根拠は、ムージルがこのエッセイを書く「動機」と、そして「刺激」がケルその人にあったからである。つまり先に引用した1月30日の日記でムージルは「『パーン』に載せる方は寄与を果たしたい、そのことに役に立ちたいという願望。ただし他人のイニシアティブの下だから、個人的な利得は抜きになるが…」とエッセイ執筆の動機、目的を書いており、同じく2月21日には「ケルのヤーゴ宛の書簡体文書を読んだ一ものすごく的確だ。ぼくの原稿は…」とケルと自分のエッセイを見比べて考察し、その後自分の原稿を推敲した。

ここで言及されているケルのエッセイは、言葉を尽くしてフロベールを絶賛し、この比類ない作家の創作ノートとも言うべき日記にクレームをつけた警察当局を、完膚なきまでに叩き、嘲笑したものである。ムージルは、ケルがフロベールを絶賛している部分に、敏感に反応したのかもしれない。ムージルのエッセイでは、作家ムージルの顔があまりにも前面に出すぎている。ケルの役に立ちたい、との意図はどう見ても後ろ側に後退している。作家ムージルの特徴、独自の面のみが、度はずれて強調されている。フロベールと張り合っているムージル、そう考えてこそ、ムージルのこの妙に力のこもったエッセイの全体が見えてくる。

ムージルの態度、考え方には矛盾があるのかもしれない。その見据える地平は、遥か彼方の地点である。読者にも、世論にもムージルはさほどの関心が湧かない。科学では到達できない真実の獲得のために、大衆は何ら必然の要素ではなかった。しかし、奇妙なことに、そうしたムージルの意識に反比例するかのように、ケルという存在はムージルにとって、一つの場所に位置を占め、しかも体積を増しつづける火山性の岩石のように、何か特別のものであり続けるばかりである。

エッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」を書くとき、そこにはケルのためとの意識と共に、ケルへの自己PRの気持ちも働いている。フロベール、何するものぞ、というところ

をムージルは、ケルに見せたかった—このエッセイを書くムージルは、このような気持ちを持っていた。

こうした状況をケルの側から見てみると、ムージルの意図がうまくケルに届くとは考えにくい。人と人との関係は、地球から見た月のようなものである。感情が絡む人間関係ではとりわけそうであろう。必ず、同じ一面しか見えないのである。ケルから見えるムージルの姿は、ケルを頼むムージルの景色ばかりであった。『テルレス』以降、自己の文学を求めて格闘する姿は、ケルにはせいぜいムージルの「裏の面」として臆に感じられるものでしかなかった。

こうしたムージルにかかづらっている余裕はケルにはなかった。ケルは全身、全力で権力と闘わなければならなかった。そして、勝つことが必要であった。「パーン」の命がかかっていた。ケルの命であり、読者の命ともいえるかもしれない。現象でいうならば、雑誌が読まれること、広く読まれること、この一点がケルにとっては重要であった。勝つための手段であり、目的でもあるからである。ケルの頼むところは世論であり、数であり、大衆である。

フロベールを評価するという自体は、ムージルもケルも同じであるが、その中身は相当に性質の異なるものであった。ムージルのエッセイが出た後も、ケルないし「パーン」とベルリン警察との対立は、主にこの「パーン」誌上を舞台に長く続くことになる。その矢面に立つ人物はもっぱらケルであった。しかし、ケルはこの後、ただの一度もムージルのこのエッセイに言及することはない。こうした点で、ケルはケルで自己に厳しい。身内を頼り、身内に頼られつつ闘う、そうした姿勢は、もとよりケルにしてみれば何ら闘いではなく、すでにそのことが敗北であったろう。しかし、ムージルにしてみれば事情は違う。

ムージルは、やはりケルにだけは誉められたかった。『テルレス』から5年を経過した今、もう一度自分をまっすぐ正面から見て欲しかった。「批評」の言葉も欲しかった。こうした気持ちで、初の本格的エッセイを書く彼のペンを走らせ、そしてまた、ためらわせもしたのであった。「誰とも付き合わない」(TI, 234) 中で、果てしない彼方を見つめながら孤独な仕事にとりかかっているムージルにとって、ケルは幻想の中の、無数の読者であったのかもしれない。

若干の紆余曲折はあるものの、その後もケルが編集の中心でありつづけた「パーン」に、ムージルが寄稿したのは、結局このエッセイ1篇のみであった。

VI ムージルのエッセイ「親愛なるパーンへー！」と「パーン」のその後

このムージルのエッセイに対し、同じ「パーン」9号に載ったケルの「ヤーゴに宛てた最後から2番目の手紙」は、ベルリン全部は言うに及ばず、全ドイツの関心と注目をさらった。この「手紙」の中でケルは、ヤーゴが女優ティラ・デュリュエに当てた私信の全文を紹介したのであった。

[...] あなたはその日の午前中、観客席平土間にその女優がいるのに気付く、そして話をしました—そしてその日の午後、あなたは以下のことを手紙に書いたのです。

「アレクサンダー広場6

拝啓

私は演劇検閲をなすべき立場にありますゆえ、俳優の方々と親しくお話できる機会に恵まれますならば、大変に好都合に存する次第です。本日交わしました私たちの会話が、更に継続されんことを切に望む次第です。あなた様のところへお伺いしてもお邪魔ではないでしょうか？ 日曜日の4時30分などはいかがでしょう？」

この文面に続けて、あなたは「心よりの恭順とともに」と書いただけではなく、慎重を期して「お返事、親展と表書きしていただきますように」と付け加えておいでになる。[…]¹¹⁾

これに続くケルのヤーゴに対する攻撃の調子は強硬であり、執拗である。ティラ・デュリュールはパウル・カッシーラーの妻でもあった。意図的に、ヤーゴに近づいた。それやこれや、隙だらけのヤーゴは色仕掛けにまんまと乗せられた¹²⁾。ドタバタ劇の演出家はケルであった。ヤーゴに宛てたケルの今回の「手紙」には、ドイツ中で議論が沸騰した。ケルの側もやり過ぎではないか、いや当然だ、ジャーナリストの面汚しだ、と意見が諸説紛々入り乱れる中で、ウィーンのカール・クラウスはこれまでのケルとの軋轢も手伝い、この後この件に関連して、ケルへのこれまた執拗な攻撃を続けることになるなど、場外乱闘も盛り上がった。

「パーン」の差し止めについてのその後であるが、この後すぐの「パーン」10号に、カッシーラーの戦線離脱宣言が載り、一方ケルは態度を変えることなく、その書き物で当局をチクリチクリとやり続け、そうした状況が続くうちに6月になって裁判が行われた。裁判の結果、6号については、ことさらに猥褻性は認められないとの判断で「無罪」、7号のフロベールの日記については、「青少年、その他への悪影響が心配される」が、そうした意図があったわけではないことが認められ、酌量減刑ということで罰金50マルクの判決が下された¹³⁾。

その後、ケルはカッシーラーとの間が気まづくなり、結果、この年1911年11月16日付「パーン」第2年度刊4号を機に、「諸々の意見の相違」のゆえに、彼は「パーン」と一切の手を切ることになる¹⁴⁾。が、こうした形でケルが去った「パーン」を続けていくことは難しかったようだ。翌1912年3月21日付「パーン」第2年度刊18号の表紙に、「アルフレート・ケル、4月より編集長！」¹⁵⁾の活字が大きく躍った。カッシーラーは「パーン」の権利をハンマー出版に譲り、去って行った。しかし、ケルの華々しい再登場の後ちょうど1年の年月が経過したころ、すなわち1913年3月28日付「パーン」第3年度刊26号が出た後に、なぜか「パーン」の動きに衰えが見られるようになり、予約購読の形で4月、6月、8月、12月とそれぞれ一回ずつ姿を見せ、1914/15年度刊としてもう一度だけ登場したきり、ケルの「パーン」は戦争の時代と共に眠りについてしまった。もう一度、あの1911年当時のムージルの「親愛なるパーンへー！」を思い返してみよう。

親 愛 な る パ ー ン へ ー ！

親愛なるパーン！

私がこうした形であなたに宛てて手紙を書くのは、中身を失ってしまい、みずから不機嫌になってしまったあなたの存在を、あなたがギリシアの山々のどのあたりに埋めたのか、私が知らないからなのです。最近になって、あなたがこのツェルマットにやって来るのでは、と考えるようになりました。ここへいらしたなら、遭難者が眠るイギリス教会の右手から登ってください。道は急勾配の牧草地を越え、岩の裂け目を通してヘーバルムとホーリヒトへ通じています。どちらへ向かって同じです。[…]

[…] あなたは、いにしえの郷土人ホメロスの目に映った、その大きく、強靱で、純真な動物の目に映った牧歌的な風景の中に、あなた自身を置いているのを感じることでしょう。[…]

さて夜になると、あなたはスモーキングに着替え、ザイラーかジンドローでディナーです。遙か昔に下品になってしまった感情が働いて、登山靴からエナメル靴へ跳躍するというのではなく、あなたの行動にふさわしい魂の内実を獲得するために。お店へ行くと、現代の魂が快適さと

みなしている多くのものを目にすることができます。あなたにとっては初めてのものもあるでしょう。言うならば、趣味のよい家庭雑誌の小説の世界です。広間、薪が赤々と燃えている暖炉、ウィーンの楽団、ミュンヘンのピヤホール、アメリカンバー、戸外のテニスコート、九柱戯、そしてアメリカ人向けの教会、彼らは彼らの愛する神をお茶に招こうとでも考えているのでしょうか。あなたは、ありとあらゆる言語で話をしているこの人々の心のうちはどうなっているのか、いぶかしく思うことでしょう。そういうときには、特にタウホニッツ出版の小型本に気をつけて、注目してみてください。雨の日、食事の席を離れるとき、彼らの誰もが精神のいかがわしい排泄物としてそれらの本をテーブルの上に残していくことでしょう。

バーンよ、あたり一面、静かにうねる氷河の海です。マッターホルンは、二つの登攀ルートを外れると、ホールド一つすらもなく、まるで塔の壁です。その壁に、五本の手の指、五本の足指で取り付いていると、突然、風に運ばれた小さな蜘蛛だ、との自覚が生じます。一つのミスによって命が終わるのではなく、自由意志による離脱。氷河を歩くときも同じです。雪盲になる、異常に敏感になった耳、氷の荒れ野はあたり一帯、叫び声で満ち満ちているのです。心の内の一切が、「自分はこれで六度同じ場所に戻ってきた、毎度クレバスに阻まれて、通過場所を発見できずに」、との暗く、動揺した感情に、そ知らぬ振りを決め込みます。疲労、自己に対する見込みのなさ、窮屈になった内奥、こうしたことから結局、自らの意志で死に赴く。事故とは言うものの、半ば自殺というべきでしょう。

もちろんこのときに、「恐れを知らぬアメリカ人青年」として、ドイツ人予備役少尉として、あるいは上流階級の人々の軽い冗談や洗練された仕草に伴われて、生を終えることはある種の癒しではあります。人は自分自身の死を死ぬのではなく、典型的な死を死ぬのであり、胸へそらせるこの効果をもって本来的な感覚を麻痺させるわけです。親愛なるバーンよ、しばらくの間は、そうした人々の体からその小さな固いかたまりを取り出すことと、あっという間もなくピチャッと潰れてしまう、各人色々に異なる甘いゼリーを吸ることを楽しんでください。

[…]

こうした雑踏の中で、あなたは、人々によく知られている「生活」を発見することでしょう。「うっとりするエレガンス」を身にまとった美しいご婦人方、ブラックコーヒーを片手に当地からその大事業の指示を送る殿がた、危険を求め、何ら躊躇することなくその命を賭ける若者たち。実際、この「強い、情熱的な生活」は無能な小説家のこしらえ事などではなく、ここに存在しているわけです。そして、家庭雑誌の芸術こそは真の、この上なく真面目なりアリズムということです。

バーンよ、本当に偉大な情熱は、人が熟慮を重ねた紙の上にあるのです。というのも、自分の生を何かに賭ける事ではなく、自分の生の内に賭ける何かが決定を下すのです。あなたは早晩、実際的な人間素材の中で仕事をする意欲を失うことでしょう。私はほんの駆け出し、あなたはおそらく私が作家であることもご存知なく、そうした者の言葉などついぞ気にかける必要もないのでしょうか。しかしながらあなたは当地で、人生の大いなる情熱についての作り話をおのずと疑うようになるでしょう。この世の神であるか、来るべき世界の弁神論を書くことにのみ集中するか、この選択の前で、あなたは後者へと傾くことになって行くでしょう。机上の合理主義を前提にするのではなく、生の救済として。そうして一フルートの神よー、あなたは本を書き始めることでしょう。ただし、その本は文学版ベーデカーが、よいホテル、よいレストランを表示するための例の星印を付けてはくれない本です。

「パーン」の動きが目立って不活発になるのは、ムージルの初エッセイが「パーン」に載ったときから数えて丸二年後の1913年3月である。その初エッセイと同じ時期に書いたこの「親愛なるパーンヘー！」で、ムージルは「パーン」が果たすべき使命を説き、「現実」あるいは「事実」に重きを置きがちな「パーン」あるいはケルのそうした傾向にはっきりと危惧の念を表明し、そして警告を発した。

本論のV章で、ケルは「パーン」を守るために、そして大衆から得られる「パーン」への支持をさらに大きなものにするために、全力で当局側と闘わねばならず、ムージルを相手に、複雑で微妙な文学の、芸術の議論をしている暇はなかった、という点について述べた。ムージルは、「パーン」のために、そしてケルのためにエッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」を書きながら、さすがにその文章全体は、自分の文学論の展開だということを、心の片隅で分かっていたに違いない。それゆえに、より直接的な「パーン」擁護論、真の「パーン」応援のエッセイを書く必要があった。そのエッセイこそがこの「親愛なるパーンヘー！」である。いかにすれば「パーン」が「死」を回避しうるか、その神性にふさわしい永遠の命を、真に力強い生命力を獲得することができるか、このことをムージルは「精一杯の愛を込めて」(TI, 234)書いた。

きらびやかな人々との交わり、そうした人々への関心への戒め、登攀ルートを間違えることは「半ばの自殺」であること、真の情熱とは何か、果たすべき使命とはすなわち、思索に基づいて「来るべき世界」への指針となるものを書き、発表すること—ムージルは、ケルに向かって一心に呼びかけている。さもなくば、待ち受けるものは、「死」。

戦争の時代に眠りについた「パーン」は、戦後も休眠から目覚めることはなかった¹⁰⁾。本来に「パーン」は死んでしまったのかもしれない。1910年から11年にかけての冬、ムージルは自身とケルとの相違点を感じ取っていた。結果的には不吉な予言でもあった「親愛なるパーンヘー！」は、大きな岐路—パーンの死か、生か、真の文学の追求か、センセーショナルなトピックスへの関心か—、この決定的な分かれ目、峠、危機に際し、ムージルを介し天の大神から下された警告であったのかもしれない—「パーン」よ、私の言葉に耳を傾けてくれ！私のパーンへの思いを！…。もっとも、この声は、ケルには聞こえようもなかったのであった。すなわち、このエッセイは最終的にはゲラ刷りのままに放置され、誰の目にも留まることはなかったのである。内容についておそらくは、ケルも知らなかった。しかしながらムージルのこうした考え、「パーン」への呼びかけの意図は、「芸術における猥褻性と病的なるもの」を通してケルにも伝わっていた。ムージルとケルは、それぞれに信じるところをいささかも譲らなかった。

注

ムージルのテキストは以下のものを使用した。

Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (本文中ならびに以下の注で P. と略記し、その後にページ数を記す)

Robert Musil: *Tagebücher*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983. (本文中ならびに以下の注で TI. と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) „PAN“, Jahrgang I, 1910/11, S. 181ff.
- 2) a. a. O., S. 183.
- 3) a. a. O., S. 185.
- 4) a. a. O., S. 217-213.
- 5) Vgl. TI, S. 235.
- 6) „PAN“, a. a. O., S. 8.
- 7) P., S. 748ff.
- 8) „PAN“, a. a. O., S. 230.
- 9) P., S. 977-983.
- 10) ギュスターヴ・フロベール『フロベールのエジプト』（法政大学出版局，1998年，斎藤昌三訳），「訳者あとがき」332頁参照
- 11) „PAN“, a. a. O., S. 287.
- 12) Vgl. Karl Corino: *Robert Musil und Alfred Kerr*. In: Karl Dinklage u.a.(Hg.): *Robert Musil. Studien zu seinem Werk*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1970, S. 251f.
- 13) Vgl. Wilhelm Herzog: *Die unzüchtige No.7*. in: „PAN“, a. a. O., S. 587-590.
- 14) Vgl. „PAN“, Jahrgang II, 1911/12, S. 131.
- 15) Vgl. „PAN“, a. a. O., S. 519.
- 16) Vgl. „PAN“, Jahrgang III, 1912/13, S. 635ff., sowie „PAN“, Jahrgang IV, 1914/15, S. 1-55.